さざなみ国語教室
さざなみ国語教室
第441号　2018年12月25日
発行者代表　吉永幸司
連絡先　大津市柳川2-11-5
TEL 077-522-1008
発行所　滋賀児童文化協会
NPO 現代の教育問題研究所

ニホンゴがんばれ！

長尾　寿

はしを使って食事する国、ナイフとフォークで食事する国、素手で食事をする国とマナーは多様ですが、人種・信条を問わず、正しい鉛筆の持ち方は世界で共通しています。しかし、日本ではその常識が通用しなくなっているのです。

昔むかしの教師は、子どもの鉛筆の持ち方がおかしいと丁ねいに教え込みました。むかしの教師はおかしいことに気づきながら、それを見逃しするようになりました。そして、今の教師は子どもたちの変化に何も感じなくなりました。

そのため、鉛筆を正しく持って学習する子どもはほとんどいません。

この不幸がスマホの普及により拡大し筆順などおかまいなしです。学習机から国語辞典は主役の座をスマホに奪われ脇役となりました。漢和辞典などというものは「これ何ッ！」と子どもたちにとっては無用の長物となっている現状が悲しいのです。

私は、ドーテの『最後の授業』を想い出しています。「例え君たちが奴隷の鎖につながれても、国語を持っておれば、しばられている鎖を開ける鍵をもっているのと同じである」というものでした。

数学者の藤原正彦さんは今の学校に必要なものは「一に国語、二に国語、三、四がなくて、五に算数」と国語を強調しています。そして「公立小学校のカリキュラムに英語を入れてはいけない」「外国語教育よりも読書を」とその著書『国家の品格』で述べておられることは示唆に富んでいます。

重くなっているランドセルを教科書のぶ厚さのせいにしてはなりません。ランドセルの重みの中味に国語の存在のずしり感が求められます。

子どもたちの教科書は全国一律ではありませんが、私の住んでいる大津地区の国語の教科書は、一年生「たぬきの糸車」、二年生「スーホー白い馬」、三年生「モチモチの木」（いずれも下巻）など六年生まで、すばらしい教材に満ちています。たっぷり時間をかけた音読や詩の朗読など子どもたちの自律心をふくらませる授業を期待するものです。

“ニッポンがんばれ！”はスポーツ界用語ですが、私は“ニホンゴがんばれ！”のエールを先生方の送ります。

（社会福祉法人
風の子保育園理事長）

さざなみ

▼保育園の参観をした。お絵かき、読み聞かせなど心を豊かにする活動に園児達は夢中になっていた。園庭では自転車に乗る子、ボールで遊ぶ子。魂が動いていると表現された園長さんもおられた。その通りの風景であった▼草むらで小さい花を探したり虫を見つけたり、草をかき分けたりしている子達に近づいた。「ね。このお花きれいでしょう」「アキちゃんとみつけたのよ」「アキちゃん。ここだよ」つぶやくように、はなしかけるように盛んに言葉がでてくる。虫を見つけたといって友だちに見せる子。負けずに探し、比べようとする。つぶやき、ささやき、自慢、強がりなど言葉が飛び交う▼「園児は、発見が大好きです。発見には必ず言葉が生まれます」と、園児のコミュニケーションについて園の日常をお話をしてくださった▼話を聞きながら、「発見」はコミュニケーションと深いつながりがあることに気づいた。そのきっかけは、お絵かきや読み聞かせより、草むらの遊びの方が、コミュニケーションを活発にするという園長先生の言葉が印象に残ったから▼「発見」という言葉を小学校の授業では日常的に使ってきた。しかし、話したい・聞きたいという心を動かすところまではいっていないのは幼児の心を動かす草むらのような生命観がないからであろうか。

（吉永幸司）

未来を生きる子どもたちに ～六年生での教科等横断的視点に立った指導を通して～

勝矢　真一郎

新学習指導要領では、教科等横断的な視点に立った資質・能力の育成を目指すことが挙げられている。各教科のねらいや特性をふまえつつ、教育課程を見直し、言語能力や情報能力など生涯にわたって学び、各教科を通じて横断的に資質・能力の育成を目指すことになる。これを進めるにあたって必要性が求められている資質・能力を考えた。ちなみに、各教科付けたいる６年生のこととである。担任科を結び付けることは、「キーワード」で各教科や単元の特性と絡めたときに、「生き方」「未来」というキーワードが浮かび上がってきた。思春期を迎え、何かと思い悩んだり、身の特性を良くも悪くも自覚した自意識なこと・苦手なこと自分のこと、「自分は未来に向かって生きていきたい」と思う今、どのように生きていきたいのかを追い求めて？」という根源的な問いを必ずもつことが、子どもたちに求められる。教科の枠にとらわれない、各教科の学習の意義や関連性を、より強固なものにできると考えた。２学期では以下の実践を行った。

【国語科】
①よりよい未来にするために（光村）
「人権」や「環境」など問題意識を感じたテーマについて、意見文を書く。
②やまなし、イーハトーブの夢、雨ニモマケズ、宮沢賢治作品
作品を通して宮沢賢治という一人の人間の生き方、考え方に迫る。
人権集会で「雨ニモマケズ」の群読を行う。

【社会科】
①天保一揆はなぜ起こったのか（地域教材）
幕府の不正な検地に立ち上がった百姓たちの行動原理と時代背景を考える。
②部落差別問題学習
厳しい差別、渋染一揆や水平社宣言などの歴史的事実から、年間を通して、「人間としての尊厳」「人としての生き方」について考える。

【総合】
昔とつながろう（戦時中のくらしや原子爆弾、赤十字の取り組みなどについて調べ今の私たちにできることを考える。）

【体育科】
組体操　伴東維新　～未来をその手で切り拓け！！～
テーマに「維新」「未来」を入れることで、身体的表現、仲間との協力などによって、未来や時代を切り開いていく様子を表現する。

このように、各教科に絶えず「キーワード」を意識的に入れ込むことで、学習者である子どもたちが、必要な資質・能力について「自覚」し、「どう生きるのか？」という問いに向かって学びを深めることができるようになってきた。３学期の国語科では、読むこと領域では「海のいのち」や「生きる」、話すこと聞くこと領域では「今、私は、ぼくは」、書くこと領域では「忘れられない言葉」など、さらに「生き方」「未来」について思いを巡らす、集大成ともいえる教材が控えている。そして、卒業式の日にはこう問いたい。「君たちはどう生きていきたい？」と。指導者である私自身も、「子どもたちの未来のために生きる」という生き方をぶれずに全うしていきたい。

（甲賀市立伴谷東小学校）

作文研究会

高野　靖人

11月24日（土）に、大津駅前の大津サテライトプラザで「子どもの作文の評価と作文指導法の研究会」が行われた。主催は、「さざなみ国語教室」と「ＮＰＯ法人現代の教育問題研究会」。参加者は、さざなみの同人を含めて二十名だった。

三部構成の第一部は「作文演習タイム」。４・５名のグループに分かれて、持ち寄った作文を材料として短評を交流したり、作文の見方や指導法を交流したりした。私のグループは、全員が選択した１つの作文の短評を書き、交流した。顔の分からない児童の作文に対して、ほめ方、アドバイスの仕方、活用の仕方など様々に話し合うことができた。

第二部は、「講演」。演題は、「子どもの書く力の向上と指導法の開発・向上をめざして」。講師は、西村嘉人先生（彦根市立稲枝西小学校）。西村先生は、昨年度定年退職されたが、本年度再雇用で上記の学校の四年生担任として十六名の児童を指導されている。しかも、複数の児童が個別の支援計画が必要な状態で、教室が静かになると我慢できなくなる児童が三・四名といった状態からのスタートだったらしい。そうした中、１・２学期の教科書教材また作文単元等で具体的な学びの姿が語られた「学習の手引き」を子どもに意識・理解させて、自分で学べるように指導すると語られたことが印象に残っている。土日作文、全校作文についても教えて頂いた。全校作文については、資料が添付されていたので、実際に参加者も演習として記述した。１年生から６年生まで、発達に応じた取り組みができることが利点であろう。

第三部は、研究会のまとめとして吉永幸司先生の「講話」、「本研究会に学ぶこと」であった。まず、作文指導の中で生活作文と学習作文の違いについて話された。自由に書いた生活作文に対しては、ごちゃごちゃ指導しないことが原則。反して、学習作文は、目標に合わせた評価・指導が必要。日記など自由作文では、どのように指導するか、またどのように活用するか、留意する必要がある。日記には、俳句のネタがいっぱいあることも教えて頂いた。書くことの意義として、学習の履歴が残ること、成長が分かることを指摘された。その時々の自分が刻印されるのは、書くことによってのみであると。「ごんぎつね」や「お手紙」など教材に関わる指導の留意点や評価・子どもへの返し方に関わる留意点など、示唆に富んだお話が続いた。今流行の「主体的、対話的で深い学び」についても教えて頂いた。

年度のちょうど中間点に位置付く研究会。特に、若い先生方には、今後の作文指導への展望が開けたのではないだろうか。

（さざなみ国語教室同人）

思い浮かんだ言葉

弓削　裕之

「先生、できました。」

感想を書き終わった子が、手を挙げる。では読書をして待ちましょう、とは言わずに、「時間がくるまで、言葉を足しましょう。」と声をかける。すると、それまですらすらと書いていた子の手が止まり、考える顔になる。一文字、二文字・・・一行、二行・・・言葉が増えていく。「できた」の先に生まれる言葉たちは、どこか原石のようである。

『ずうっと、ずっと、大すきだよ』（光村一下）の一時間目。教師の読み語りを聞き、音読をした。子どもたちがいろいろとつぶやいている。ため息をついている子も。今、この瞬間の気持ちを言葉で表せたら。めあてには、「よんだかんそうをかこう」と書かずに、「おもいうかんだことばをかこう」と書いた。子どもたちの頭にクエスチョンマークが浮かぶ。「感想」という言葉に慣れてきた子どもたちに、揺さぶりをかける。

「今、読み終わって頭の中にある言葉をノートに書きましょう。自分で考えた言葉でも、お話の中にある言葉でもどちらでもかまいません。どのように書いてもいいですが、絵などではなく、言葉で書きましょう。」

●なかよし　ふしぎなきもち
なみだをのむ　さみしい　かなしい　こころがいたむ　だいじな犬
みんな大すき　いつもいっしょ
ともだち、

●エルフずっと大すきだよ。エルフのことしんぱい。エルフ大じょうぶ？エルフぜったいにわすれない。エルフずうっと一しょだよ。じゅういさんどうですか。エルフどうしたの？エルフかわいそう。エルフゆっくり休んでね。エルフきみは、かしこいんだよ。

●エルフは、やさしいな。エルフは、にんきものだな。エルフのおなかは、あったかいんだな。エルフのゆめは、どんなゆめかな。

●エルフ大すきだよ。エルフのことはぜったいわすれないよ。エルフのえがおはいつまでもわすれないよ。ありがとう。いつもいつもあいしているからね。

●なくなったのはさみしいけれど、ずうっとずっと大すきなきもちだよ、わたしも。わたしがもしかったら、まい日だいてあげるしずっと、ずっと大すきだよっていってあげるよ。まい日ぜったいにいってあげるよ。

●エルフがしんじゃってかなしかったです。わたしもきんぎょをかっているので、ずうっとずうっと大すきだよ。っていってあげたいです。

つぶやいたり、語りかけたり、自分と重ねたりしながら、子どもたちは鉛筆を動かしていた。「あるあさ、目をさますと、エルフがしんでいた。よるのあいだにしんだんだ。ぼくたちは、エルフをにわにうめた。みんないてかたをだきあった。」と、エルフが死んだ場面を丁寧に書き写している子が一人いた。いつもは感想を書く手が止まっている子。どのような心の動きがあったのだろう。次の時間が楽しみだ。

（京都女子大附属小学校）

「気になること」が見つかった！「プラタナスの木」

西村嘉人

「プラタナスの木」（椎名誠・作）の学習を進めている。長く四年の国語を担当していなかったので、子どもと読むのは初めてである。

時間に少しゆとりがあるので、学習のてびきを自分で読み、学習を自分で進め、読後の感想文を書く学習計画を立てた。

さて、授業である。

物語を一時間たっぷり音読した後、次の時間に学習のてびきを読み、学習の進め方の学習をした。

①五つの場面を確認する。
②学習のてびきに示された枠組みを真似て学習ノートに同じように作る。
③自分で物語を読んで、場面ごとに「様子や出来事」や「主人公の心情」を書きまとめていく。

③の学習を進める子どもたちが手を挙げて、わたしを呼ぶようになった。子どもの席に行って話を聞いてみると、

「このおじいさん、なんか不思議な感じ。」

「なんで急に現れて、マーちんたちと仲良くなったん？」

隣の子どもが話に入ってくる。

「プラタナスの木が切り株だけになったら、おじいさんもいなくなるって、なんか変やわ。」

子どもたちの頭の中に「？」が湧き出した。そこで、黒板に「みんなの考えを聞きたいこと」と書き、子どもたちに黒板を開放してみた。

○四の場面で、プラタナスの木がしおれたのではなく、なくなったと書いているのはどういうことか。

○三の場面で、おじいさんが「みんなによろしく」っていってるけど、どういう意味なのか。

○五の場面で、マーちんたちはきっとまた芽を出して生えてくると思っているけど、みんなはどう思う。

○五の場面で、木が切られておじいさんがすがたを見せなくなったと書いてるけど、どういうことか。

○おじいさんはプラタナスの木？

最後の子どもが書いた「おじいさんはプラタナスの木？」に教室がざわつきだした。隣の席の友だちと教科書のページを開けて確かめる子ども。グループで頭をつきあわせて話し出す子ども。

「なんか、気になることが出てきたみたいですね。一時間、みんなで話し合ってみますか？」

の問いかけに、「やった！」と反応する子どもたち。

「それじゃあ、自分の考えが話せるように準備しよう」

の指示に、教科書の文章に戻る子どもの勢いが印象的であった。

（彦根市立稲枝西小学校）

ミュステーリオン

好光　幹雄

二十数年前、教育課程が大きく改革されました。小学校の一、二生の理科と社会をなくし、新しく生活科という教科を導入することにもなりました。教育界全体を揺さぶる大きな改革のその影響は、多方面に及びました。

例えば、六年生の理科で、従来ニワトリの卵を孵(ふ)卵(らん)器(き)にかけ、ヒヨコが生まれてくることを観察し体験していた学習が、なくなりました。

当時の滋賀県小学校理科部会の部会長、太田源太郎校長先生は最も嘆かわしい改革であると言われました。子どもの心に生命の尊重、神秘への畏敬の念を育てる機会が少なくなったからです。

太田先生は理科を教える以上に理科を通して、人間教育を考えておられたからです。

私は、今の子どもたちには様々な重要なことが抜け落ちていると思いますが、この「生命の神秘」ということも大切なキーワードであると考えています。

卵焼きで使う同じ卵の有精卵が、二十一日後には、自ら殻を叩いて破り、雛が誕生します。心臓、頭、目があり、そして口があります。その口でピヨピヨと可愛げに鳴くのです。

この事実をどのように説明するのでしょうか。二十一日経てば生まれてくることを孵化と言ってしまえばそれまでです。しかし、それは、この事実を他の言葉に置き換えたに過ぎません。この命の誕生の不思議さについて、何も説明してはいないからです。

ですから、教科書の理科的な用語を操って学習するだけではなく、実際に孵卵器にかけて二十一日待って、命が誕生する瞬間を肌で感じなければならないのです。

この命や生命に直接触れ合う体験を幼いないときにしておかなければ、他者の命や自分の命の尊厳を感じることが出来ない無感動な人になってしまう恐れがあるからです。

このような命の不思議さのように、人間の叡智を結集しても到底説明の出来ないことを、古代ギリシア人たちは、ミュステーリオン（神秘）と言いました。今の英語のミステリーの語源です。

ところで、過去に猟奇的な殺人事件は幾つもありました。それは命を命として弄ぶものでした。しかし、平成になって地下鉄サリン殺人事件を筆頭に、もはや命を命とも思わない殺人事件が頻発しました。中でも大阪教育大学附属小学校の児童殺傷事件は、教育者としての我々を震撼させました。

しかし、もし彼らが、高度経済成長の渦の中で、合理化と受験戦争を生き抜いていくために、感じることよりも机上で分かることを、熟慮することよりもできることが優先され、「神秘」に出会う機会を教育の中で奪われた人間だとしたなら、私たち教育者の責任は極めて重いのです。

（さざなみ国語教室同人）

編集後記

▼十一月例会（四四十回）は、「子ども作文の評価と作文指導法の研究会」（ＮＰＯ法人現代の教育問題研究会・滋賀大学サテライトプラザ）を開催した。研究テーマ「子どもの書く力の向上と書くことの指導法の開発と向上」。内容は「作文演習タイム・講演・講話」であった。▼「演習タイム」では、参加者が持ち寄った作文を読み、評語・指導文を書く。さらに、作文活用の仕方について意見を交流した。「講演」は西村嘉人さん（彦根市立稲枝西小）が「子どもの書く力の向上と指導法の開発と向上をめざして」について、国語教室における書くこと国語科授業としての書く活動の違いや指導の仕方のお話であった。内容には、教科書教材の指導では、構成や表現方法への示唆を、日曜日作文では知らないこと伝えることの意図を全校作文の具体的な内容と方法について指導の視点を示された▼「講話」は吉永が行った。ポイントは①作文指導では学習作文と生活作文の目的と事実、記述の内容と方法・意図の側面から考えること②日記など自由作文では指導の視点と書いた作文をどのように活用をするか③書くことにより育てる力を態度・技術からTAP103s考えることについて④これからの教育の方向である「主体的・対話的で深い学び」における「対話的で深い学び」についての考え方についてまとめた。▼巻頭には、長尾寿先生から玉稿を頂きました。深謝。（吉永幸司）